

新晃工業

# 工場投資活発化で引合い増

ダブルプラグ  
ファンに動き

## 高顕熱直膨、製品化へ

空調機器総合メーカー、新晃工業（社長＝武田昇三氏、本社・大阪市北区南森町1-4-5）は、平成31年3月期第1四半期連結業績（平成30年4月1日～6月30日）を発表した。

それによると同期間の業績は「建築着工金額が増加するなど需要の高まりは認められる」としながらも「当四半期における空調機の全国出荷台数

が減少するなど納期調整に苦慮する事業環境で推移した」と振り返り、「当社グループは生産量の拡大策の実行、戦略受注による収益基盤の一層の強化と合わせて個別受注生産サービス向上などに関するシステム投資、製販連携による生産性向上に努めてきた」とする。

こうした取り組みの一方、納入現場の工事の遅れなどで空調機器の出荷物が少ない中で動きが

が予定通りに進まず、同社グループ売上高は前年同四半期比0・8%減の68億5千700万円となった。利益面では、空調保守工事の戦略受注強化が奏功したものの、一部の低採算物件により、セグメント利益（営業利益）は、前年同四半期比34・7%減の5億2千900万円となった。

関西エリアでは「新築物件が少ない中で動きが

活発化しているのがホテルだが、かなりの規模（のホテル）でもビルマルが採用される傾向にあり、水方式の採用が厳しい側面も見受けられる（営業開発部長・稲川健氏）と地域動向を話す。ホテルの新築ラッシュと並行して西日本エリアでも顕在化してきたのが工場系の設備投資。生産増強や研究開発を狙いとするもので、「ここしばらくは増勢基調が続く」と見る。

工場系案件で動きが見られるのがダブルプラグファン空調機。同空調機は全体的なバランスの整備により、平均効率（仕様風量選定平均効率）75%を達成している。ベルトレス化の駆動方式で工場などの長時間操業体制に対応し、メンテナンスコストも大きく削減できる特徴を持つ。

同社では工場系案件のほか、再開発事業なども視野に入れ、果敢に提案活動を加速させる。

また、新晃工業は小規模サーバルームや改修案件などを当面のターゲットとする「高顕熱型直膨空調機」の製品化にメドをつけた。直膨式空調機で吹出温度±1・0度Cという高い精度を実現している。